

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだい

JGDA
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 43 号

(2013 年 6 月 20 日)

発行所：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学人文社会系研究科 社会心理学研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：唐沢かおり 編集担当：北村英哉

【目次】

§日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会へのお誘い……………	2
★大会準備委員長から：今川民雄	
§学会役員の改選・交代について……………	3
★新会長のご挨拶：唐沢かおり	
★退任のご挨拶：山口裕幸	
★2013-2014 年度役員選挙の経過と結果：今川民雄	
§「研究の国際化支援」制度の助成を受けて……………	6
中島健一郎	
§関西社会心理学研究会(KSP)を記録する：40 年・400 回・4000 枚……………	7
三浦麻子	
§第 14 回アメリカ人格社会心理学会 (SPSP) 参加記……………	9
樋口 収	
§事務局からのお知らせとお願い……………	10
★研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について	
★実験社会心理学研究 掲載予定論文(2013 年 6 月 1 日現在)	
★実験社会心理学研究の特集テーマ募集	
§グルダイ学会関係連絡先……………	11

★日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会へのお誘い★

大会準備委員長 今川民雄（北星学園大学）

6 月を迎え、北海道以外の地域では梅雨入りとのこと、会員の皆様には湿度の高い蒸し暑い気候の中で、仕事に励んでおられることと思います。日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会を開催させていただく北星学園大学の周辺では、ちょうどライラックが花開いています。ここ札幌では気温の上下があるものの、天候はさほど不順ではなく、あとひと月後の大会当日もすっきりとした空気の中で皆様をお迎えできればと心待ちにしているところです。



ところで今回は、他の学会の開催状況に影響されたいこともあって、発表申込件数が今一つ伸びず、再三にわたって締切日を延長させていただきました。結果的には、口頭発表・ポスターセッション・ワークショップを含め 96 件の申し込みがあり、例年に劣らない発表件数で大会を開催することが出来そうです。会員の皆様には大会開催前にもさまざまな形でお世話になり、大変感謝いたしております。

さて、会場となります北星学園大学は、札幌市の地下鉄東西線大谷地駅下車徒歩 5 分ほどの立地にあります。大谷地駅は、地下鉄東西線の終点新さっぽろ駅（JR 駅と隣接）からは 2 つ目、地下鉄南北線や東豊線との乗換駅である大通駅から 15 分程です。新千歳空港

からの連絡バスも地下鉄大谷地駅直通のものがあり、ホテルから来られるにも、空港から来られるにも交通の便のよい場所にあります。大谷地駅から歩いて 5 分ほどのキャンパスへはサイクリングロードを経由していただくことになり、天気さえよければ格好の散歩道です。また大学の敷地はさほど広くはありませんが、キャンパスを中心にこじんまりと纏まっています。大会会場は、受付とクロークを別にすれば A 館（写真参照）4 階のフロア内にまとまっており、懇親会場も大会会場から中央のキャンパスを横切れば 2～3 分と掛からないところにあります。会員の皆様には、会期中も懇親会時もお不便をおかけすることなく速やかに移動できるよう設定させていただいたつもりです。

大会日程は 2 日間とも休日とはいえ、大学の授業期間のはざまであることで、会員の皆様へのご負担をおかけすることになっているのではないかと危惧しております。そうした事情は本学でも同様で、大会前日まで授業があり、大会終了翌日からまた授業が続きます。そうした中でも大学院生や学部学生が積極的に大会を支えています。学生スタッフ・大会準備委員一同、会員の皆様のご来校を心よりお待ちしております。

★学会役員の改選・交代について★

【新会長のご挨拶】

唐沢かおり（東京大学）

この4月より2年間、会長を務めさせていただくことになりました。新体制の発足に当たり、ひとこと、ご挨拶を申し上げます。

本学会は、半世紀以上の伝統を基盤とし、社会心理学の研究ならびに実践を目的として、年次大会や実験社会心理学研究における研究知見の蓄積と交流を積み重ねてまいりました。この間、会員各位、特に若手研究者の研究活動を支援するための諸制度として、「アジア社会心理学会発表支援制度」や「研究の国際支援制度」が整えられてきました。また近年は、機関誌「実験社会心理学研究」も順調に刊行されています。学会発表、掲載論文の水準も高く、会員各位の研究活動の展開を支える組織としての役割を果たしてきました。

私たちが、そもそもなぜ学会を組織し、それに参加しているのかということ、当たり前のことですが、学会が研究の場として必要であるからでしょう。学会・機関誌での発表、他の研究者との議論や研究ネットワークの形成などは、私たちの研究活動に不可欠なものです。まずは、学会とは研究活動を支える組織であるという認識のもと、学会の本来的なあり方を重視した運営に努力してまいりたいと考えております。

したがって、今後2年間のミッションとしては、研究発表・交流の場としての学会を、継続的、安定的に維持できるように、実務的な運営にかかわる問題の解決に取り組むつつ、より活発な研究活動・交流の場としての学会のあり方を検討したいと考えています。

実務的な運営にかかわることについては、前期より引き継いだ問題として、今後のアジア社会心理学会とのパートナーシップや *Asian Journal of Social Psychology* とのかかわりを検討することが挙げられます。アジア社会心理学会とは、十数年間にわたり密接な関係をもってきましたが、これまでの経緯と今後の学会活動の国際化に関する動向を見据えて、新たなパートナーシップのあり方を模索する必要に迫られています。さらに、学会の法人化についても一定の圧力が予測されます。現在、グループ・ダイナミックス学会は、法人化をしておりますが、するかどうかの選択、また、しない場合はそれを正当化できる体制の構築が必要となるでしょう。今期はこれらの課題に対して、より良い形で次期に引き継げるよう、実務作業を詰めていく所存です。

また、「学会のあり方」は、常に、各執行部が議論してきたことではありますが、今期は、社会心理学という学問分野の動向と発展に対応できるような学会について、改めて、考えていく所存です。これは言葉を変えていえば、「魅力的な学会とはどのようなものだろうか」、という問いでもあります。現在、当学会は、会員数が減少しています。このことは学会の財政基盤を危うくすることであると同時に、学会の活気にも影響します。社会心理学、およびその関連分野の研究者たちが、また、特に若手の研究者たちが入会へと動機づけられ

ることも狙いつつ、現在会員である私たち一人ひとりが、発表と交流の場として魅力を感じるような学会を、維持、発展させていきたいと考えています。

これら、今期のミッションを進めていくためには、学会活動に対する皆様の関心、そしてご意見とご協力が必要です。一層の、ご理解とお力添えをいただければありがたく存じます。2年間、よろしくお願いいたします。

【退任のご挨拶】

山口裕幸（九州大学）

指折り数えて任期満了の日を待っておりました。私のような浅学の徒にはあまりにも荷の勝ちすぎた役目でしたが、なんとか乗り切れて、心の底から安堵しております。会員の皆様をはじめとして、理事そして常任理事の先生方からの強力なサポートのお陰です。心より感謝申し上げます。

私の前任の浦会長の期において、年会費の引き下げをはじめとして、「実験社会心理学研究」の電子アーカイブ化、国際化支援制度など、着実に学会の運営システムの改革に取り組んで来ておられましたので、私は、常任理事の先生方のご尽力を得て、学会運営が少しでもより健全なものになるように心がけました。

本学会は、若手の比率が減少しつつある少子高齢化の傾向を示していますので、若手、とりわけ学生会員の研究発表を促進することを目指して、学生会員の学会大会発表費を無料にする制度を整えました。大会開催校には面倒をおかけすることになりましたが、学会が学生会員の発表費を肩代わりすることで、学生会員の研究発表の機会を広げ、学会大会を活気あるものにすることは、本学会の存在意義を高め、いずれ若手会員の増加にもつながるものと期待しています。

アジア社会心理学会とのパートナーシップも再検討を迫られました。アジア社会心理学会（Asian Association of Social Psychology: AASP）によって1998年に刊行が開始されたAsian Journal of Social Psychology(AJSP)を、本学会会員が購入することで、AASPの基盤の安定化と発展を支えてきました。そのために会員は年会費の値上げを受け入れました。その後、15年近くにわたり、本学会とAASPとのパートナーシップは続いて来ましたが、科研費による出版助成制度の変革に伴って、現状を継続すれば、本学会の財務状態が困窮に貧することが明確になりました。数年後には確実に困難な状況に陥ることがわかっていて、看過することはできません。もちろん、会費の再値上げは論外です。そこで、昨年度の京都大学における学会大会の総会で承認を得て、AASP会長のZhang氏と面談し、5年後を目処にAASPの自立について交渉を開始致しました。昨年秋の時点で、AASPの正規会員は100名に満たず、本学会の支援態勢を即座に解除するわけにはいきません。よく話し合っ、本学会の会員にとっても、AASPにとっても実りあるソリューションに結びつける必要があります。継続課題となり、新しい執行部のご尽力を仰ぐことになり恐縮ですが、

よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、多くの先生方が大変お忙しい中、地道に責任感を持って着実に遂行していただきました。大過なく任期を終えることができたのは、そのお陰だということは忘れません。皆様のご尽力に深くお礼申し上げます。

【2013-2014 年度役員選挙の経過と結果】

選挙管理会委員長：今川民雄（北星学園大学）

選挙管理会：今川民雄（委員長）、金児恵、三浦亜利紗

選挙管理事務局：結城雅樹（常任理事）

(1) 会長、理事、監査選挙

選挙方法及び期間：全会員を対象に郵送投票、2012 年 11 月 12 日～12 月 7 日

開票：2012 年 12 月 21 日、北海道大学大学院文学研究科プロジェクト B 室

作業者：選挙管理会員（今川民雄、結城雅樹、金児恵、三浦亜利紗）

投票総数 171、有効投票 160

無効投票 11（内封筒なし 3、内封筒厳封なし 6、投票用紙に投票者名記載 2）

以下のとおり、選出された。（同一区分内は五十音順）

〔会長〕 唐沢かおり

〔全国区理事〕（*：40 歳未満枠）

五十嵐祐*、小川一美*、鮫島輝美、戸梶亜紀彦、藤島喜嗣、宮本匠*、山口悦子、山口洋典*、矢守克也

〔地方区理事〕

（北海道）栗林克匡、（東北）日比野愛子、（関東）沼崎 誠、宮本聡介、
（中部）高井次郎、（近畿）北村英哉、永田素彦、（中国・四国）楽木章子
（九州・沖縄）池田 浩

〔監査〕 浦光博、斉藤和志

(2) 会長指名理事信任投票

方法及び期間：選出理事 18 名によるメール投票、2013 年 1 月 7 日～1 月 11 日

以下の 2 名が 18 名全員から信任された。

池上知子、橋本 剛

(3) 常任理事選挙

選挙方法及び期間：会長を除く理事 20 名による郵送投票、2013 年 1 月 16 日～1 月 28 日

開票：2013 年 2 月 1 日、北海道大学大学院文学研究科 結城研究室

作業者：選挙管理会員（結城雅樹、三浦亜利紗）

投票結果（4 名連記）

有権者数 20、投票者数 19、有効投票 76、無効投票 0

[常任理事]（五十音順）

北村英哉、高井次郎、戸梶亜紀彦、沼崎 誠

(4) 会長指名常任理事信任投票

方法及び期間：会長を除く理事 20 名によるメール投票、2013 年 2 月 4 日～2 月 6 日

投票結果

有権者数 20、投票者数 19

以下の 2 名が信任された。

藤島喜嗣、矢守克也

★「研究の国際化支援」制度の助成を受けて★

中島健一郎（長崎女子短期大学）

この度は、平成 24 年度「研究の国際化支援」制度の助成を賜り、心より感謝しております。おかげさまで、助成対象の論文が *Asian Journal of Social Psychology* と *International Journal of Psychological Studies* に受理されました。このことが、これから本制度を利用しようとしている方々、特に若手研究者のみなさまの後押しとなればと思い、ご報告させていただきます。

私は、「研究の国際化支援」制度がはじまった当初から「申請しよう！」と思っていました。（潜在的な）読者が多い国際誌に投稿するチャンスが増えると思ったからです。私自身もそうですが、安定したアカデミックポストを目指す研究者は、できるだけ研究業績を増やしたいと考えていると思います。しかし、英語が得意ではない私にとって、英語論文の

作成と英文校閲費は投稿するまでの決して低くない壁です。この制度は、その壁を低くしてくれました。それだけでなく、海外の研究者とのやりとりという思わぬ副産物もありました。校閲を担当してくださったその方とのやりとりは、単により良い英語表現を学ぶ場だけではなく、研究上の議論を行う場にもなりました。ふらっと研究室に入って、研究の話ができる相手が近くにいない私にとって、このやりとりは貴重でした。

この制度では、新規の投稿論文だけではなく、複数の審査中の論文にかかる校閲費を合算し、申請することができます。この点も魅力でした。当初、私は新しい英語論文を書いた上で、その校閲費用を申請しようと考えていました。それで、少しずつ書き始めていましたが、なかなか思うように進みません。そんなとき、論文の審査結果が 2 本、ほぼ同時に返ってきました。少し慌てましたが、改稿する中で、これは私にとってチャンスだと思いました。なぜなら、それぞれの論文の改稿箇所を合わせた場合の校閲費用が、申請額上限の 5 万円ぐらいになると気づいたからです。校閲業者も協力してくださり、費用をちょうど 5 万円にしてくださいました。この後、査読者の先生方、そして編集担当の方々が私の拙論に丁寧にかかわってくださり、今回このような形で報告させていただくことができました。本当にありがとうございました。

「研究の国際化支援」制度は、研究費の問題で悩んでいる研究者の支えになる制度です。僭越ですが、これから制度を利用する方が増え、日本における心理学研究の国際的水準がさらに高まっていくことになれば、それは大変素晴らしいことだと思います。そのためにも、私自身さらに精力的に研究教育活動を行っていきたいと思います。最後になりますが、ご支援を賜りました日本グループ・ダイナミックス学会に改めて感謝申し上げます。

★関西社会心理学研究会(KSP)を記録する：40 年・400 回・4000 枚★

三浦麻子（関西学院大学）

関西社会心理学研究会(KSP)創設以来のメンバーの一人である吉野絹子先生から「来年 3 月 30 日に [KSP400 回 記念シンポ](#)やるから、あなた話してくれない？」と依頼されたのは昨年 7 月のことでした。あまりに光栄なこと、もちろんお引き受けしないわけがありません。しかしほどなく木下富雄先生から送られてきた趣意書（抄）を読んで、深く後悔。私はでかい口をきくわりにはスケールの大きな話をするのは苦手なのです。これを何とかしなければ私の 2012 年度が終わらない。以下にご紹介する企画を思いつき、実行したのは、明らかにそんなプレッシャーから逃避するためでした。

着想したのは、KSP の歴史を分析できないか、ということでした。私が初めて KSP に参加したのは 1990 年代後半で、既に 200 回を数えていました。およそ半分しか知らないわけです。全体像を知りたい、と吉野先生にご相談すると、木下先生が保管しておられる創設当初（1974 年、約 40 年前！）からの資料をお貸しいただけるとのこと。もちろんお願い

しないわけがありません。しかしほどなく木下先生から送られてきた段ボール箱 2 つを開けて、深く後悔。ファイルボックスにぎっちり押し込まれた資料は、昔懐かしいブルーコピーのものからパワポ資料に至るまで、すごいボリュームでした。3 ヶ月ほど見て見ぬ振りをしましたが、弊研究室のポスドクと院生 4 名を召集して一気に片付けました。欠落していた部分は吉野先生からもご提供いただいたり、発表日付が判然としない資料については木下先生の手帳メモから補っていただいたりしました。最終的にはすべての例会の日付・発表者・発表題目が判明し、どうやら 2013 年 3 月の記念シンポは 400 回目ではなく、398 回目の開催に該当するようだ、ということが分かりました（[こちら](#)にまとめました）。この「いい加減さ」も KSP らしいほほえましいエピソードではないでしょうか。実は、この資料整理だけで私は力尽きてしまい、実際の歴史分析は小杉考司さんをお願いしました。シンポ当日の懇親会で披露された力作レポートは[こちら](#)をご参照ください。

多くのご参加を得た記念シンポが盛会のうちに終了し、手元に残った 40 年分の資料を眺めていて、またアイデアが浮かびました。これらを電子化すれば、そして今後の研究会資料は発表者から電子ファイル入手すれば、後世に残しやすいと思ったのです。しかしさすがに手作業でスキャンすると深く後悔することは予測できたので、外注することにしました。では先立つものは、ということでもたしても吉野先生にご相談申し上げ、特に関わりの深い先生方に寄付を募らせていただきました。ご協力くださった 13 名の先生方、ありがとうございました。また、少しでも経費を削減しようと、直近 10 年ほどの発表者の方々にご連絡し、手元に電子ファイルがあればご送付をと厚かましいお願いをいたしました。これにも予想を超える方からご返信をいただき、大変助かりました。ありがとうございました。



シンポ終了からほぼ 2 ヶ月が経った 5 月末、段ボール 2 箱分の紙資料は容量にして 250MB ほどの CD-ROM 1 枚になって戻ってきました。スキャンされた枚数は総計約 4000 枚。寄付をしてくださった方々には御礼として写真のものを差し上げ、また、発表者の許諾を得た資料は近い将来 [KSP ウェブサイト](#) から閲覧可能にする予定です。また「自分が発表した資料 PDF が欲しい」という方には、三浦(asarin(at)kwansei.ac.jp)までご一報くださればお送りします。木下先生の書き込みが入った超レアものですよ。

そもその後悔の始まりだった記念シンポジウムでの話題提供内容については、[ぐるだいニュース 42 号](#)でも一部ご紹介しましたが、[こちら](#)で当日スライド（抄）を後悔、いや公開しています。少なくとも扱うデータのスケールは大きいよ、という話になってしまったかもしれませんが、現在も「[ソーシャルメディアによる情報伝播過程と社会的影響](#)」という枠組みで研究を進めています。ご高覧いただければ幸甚です。

★第 14 回アメリカ人格社会心理学会 (SPSP) 参加記★

樋口 収 (一橋大学大学院社会学研究科)

今年の 1 月 17 日から 19 日まで、第 14 回アメリカ人格社会心理学会に参加してきました。開催場所の New Orleans は、私たちが行ったこの時期はアメリカ最大のスポーツイベントである Super Bowl の開催を 2 週間後に控え、街のあちこちでその準備が進められており、非常に活気に溢れていました。

日本からの参加者という意味では、開催時期が大学入試センター試験と重なっていたこともあり、(残念ながら) 先生方はあまり参加されていないようでした。ただ大学院生の参加者は非常に多く、色々な方とお話しさせて頂く機会を得ました。

肝心の学会ですが、89 件のシンポジウムと 2100 件ものポスター発表があり、約 2 日間の開催(初日は Pre-conferences です)ということ考えると、あまりにボリュームのある内容でした(私が前回 SPSP に参加したのは 2004 年だったのですが、当時の大会論文集を見直してみると、そのときはシンポジウムが 40 件で、ポスター発表が 800 件だったので、この 10 年で実に倍以上の規模になったことになります)。

当然すべての発表を網羅することはできなかったわけですが、私は専門領域である自己制御研究を中心に発表を聴いてきました。一番印象に残ったものは(いろいろな意味で) Kurzban の発表でした。紙面の都合があるので簡単にいうと、自己制御を続けるか続けないかは、結局のところ、自己制御対象のコストとベネフィットの計算に依存するという主張です。そこで紹介されていた研究は、甘い物を「口に含む」だけで、それがベネフィットとして知覚されるので、自己制御できるといった内容です(Gailliot や Baumeister らはグルコースの摂取自体が重要というわけですが、そうではないという主張を様々な証拠を交えながら力説されていました)。

また、Carver や Kenrick といった一流の研究者が若手研究者のためにアドバイスをするというシンポジウムもあったようです。こちらは別のシンポジウムに参加していたために聴けなかったのですが、参加した方の話によると、リジェクトされた論文に対する対処法(精神的なものも含む!)等が話されていたそうです。日本でも若手が積極的に論文を書くようになっていますが、その過程で少なからず挫折があるようです。投稿者が論文の質を上げていくという努力も当然必要でしょうが、若手に対して経験豊富な先生方がご自身のそうした苦労話をして下さると、若手は大いに励まされるかと思います。それが実質的にどこまで意味があるかはわかりませんが、そうしたシンポジウムが日本でも試験的に開かれても良いかもしれません。

久しぶりに参加した SPSP は見違えるような大会になっていました。大会が肥大化してしまった印象を受けたのも確かですが、会場の熱気は相変わらずで、充実した学会参加となりました。

★事務局からのお知らせとお願い★

【研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などございませんので、皆様奮って申請してください。

詳細は、学会ホームページ(http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)をご参照下さい。

ついに、この制度を利用して英文誌に採択された会員が誕生しました（本誌記事参照）。会員の皆様、特に会員の皆様、後に続いて、是非ご利用下さい。

【実験社会心理学研究 掲載予定論文(2013年6月1日現在)】

■ 2013年度 53巻1号 （8月中 発送予定）

原著論文

油尾聡子・吉田俊和

社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供

資料論文

白岩祐子・唐沢かおり

被害者参加人の発言および被害者参加制度への態度が量刑判断に与える影響

石盛 真徳・岡本卓也・加藤潤三

コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発

吉田琢哉・中津川智美

対人葛藤対処方略の選択に対する関係目標の影響—接近—回避の軸に基づく検討—

田原直美・三沢 良・山口裕幸

チーム・コミュニケーションとチームワークとの関連に関する検討

展望

縄田健悟

集団間紛争の発生と激化に関する社会心理学的研究の概観と展望

■ 2013年度 53巻2号 （2月中 発送予定）

原著論文

村山 綾・三浦麻子

集団討議における葛藤と主観的パフォーマンス—マルチレベル分析による検討—

黒川雅幸

もったいない感情の心的機能に関する研究

阿形亜子・釘原直樹

向社会的行動における競争的利他主義の検討

資料論文

矢崎裕美子・斎藤和志

就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす効果

山中咲耶・吉田俊和

評価者の面前におけるパフォーマンスの抑制メカニズム—認知的側面と感情体験に着目して—

【実験社会心理学研究の特集テーマ募集】

実験社会心理学研究では、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、特定のテーマのもとに論文3編程度で構成します。

特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1-2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細は、学会ホームページ(<http://www.groupdynamics.gr.jp/feature.html>)をご参照ください。

なお、実験社会心理学研究は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

★グルダイ学会関係連絡先★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

中西印刷（株）学会フォーラム内

電話：075-415-3661

FAX：075-415-3662

E-mail：jgda@nacos.com

◆学会運営・对外業務関連

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57

昭和女子大学 人間社会学部 心理学科 藤島喜嗣研究室

電話：03-3411-2945

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷（株）内

電話：075-441-3155

FAX：075-417-2050

E-mail：jiesp-hen@groupdynamics.gr.jp

【編集委員長】

沼崎 誠

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

E-mail：numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿，メールマガジンへのニュース記事投稿，新刊案内や研究会案内等のニュース記事，公募情報など】

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学社会学部心理学専攻 北村英哉研究室

E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また，マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も，同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

だいぶ夏らしく蒸し暑い季節が続いております。今年は空梅雨傾向にあるようですね。毎年梅雨どきというと、つい湿気や雨に文句を言ってしまうのですが、空梅雨というのもなんとなく風情がなく少しさびしい気がします。そこで先日、鎌倉へ紫陽花を鑑賞しに行ってきました。鎌倉といえば、長谷寺や明月院の紫陽花が有名です。その日は小雨も降り、紫、青、桃、白などの様々な色の紫陽花が雨に濡れて艶やかに咲いていました。たまには研究や仕事のことを忘れて、四季を感じにいくのもいいですね(編集子)。

